

卒業式式辞

この四月一日に、社会人として広く世界に旅立つ卒業生、大学院修了生のみなさん、また、更なる学究の意欲に燃え、進学の道に入られるみなさん、それぞれの新しい旅立ちにあたり、一言、餞の言葉を述べさせていただきます。

私をはじめに申し上げたいのは、今日のこの良き日も、それぞれの長い人生における一つの里程にすぎないということ。五年後の三月、いや、来年の三月にも、みなさんは、きっと今のこの喜びに満ちた瞬間を、今の心もちとは異なる冷静な思いで振り返ることでしょう。どうか、そのときに、私がお届けするささやかな言葉をほんの一言でも思い出していただけたらうれしく思います。

いま、世界は、騒然とした気に包まれています。ロシアとウクライナ間の政治危機、対中国、対韓国間の関係悪化、ごく最近では、マレーシア航空機の謎の失踪、そしてSTAP細胞に関する問題、それ以上に、私たちの日本には、東日本大震災からの復興という切実な課題が存在しています。そうした状況のなかで、細分化された世界の現実を巨視的な見地から読み解くことできる目、知性というものの大切さを日々、痛感している次第です。

さて私は今日、この卒業式、修了式の席にふさわしい餞の言葉として、私がつい最近、経験したことを述べたいと思います。人生における「失敗」の意味について。私はこの二月、黒海に面する保養地ソチで行われたオリンピックの閉幕式に出席してきました。ロシアで、二度目のオリンピックであり、私自身にとっては、生まれて初めてのオリンピック観戦です。私が、これまで長く研究の対象としてきたロシア、ということもあつたのでしよう。ソチに向かう直前まで、深夜のテレビ等でいつになく熱心に観戦してきました。そして、痛感したことがあります。今回のオリンピックほど、運、不運のもつ残酷さ、悲哀を強く感じさせられた経験はない。と。男子五百メートルスケートでは、金と銀メダルを分けたのが、わずか〇、〇一秒の差。私たちの日常的な経験では、けつして意識されることのない、ミクロの世界です。同じ女子五百では、二度のフライングのため、ついにスタートラインを越せなかつたドイツの選手がいました。あるいは、ソチまで来ながら、直前の怪我で出場できず、悔し涙に暮れた選手が少なからずいました。いや、オリンピックで勝利した人々の陰で、その数百倍の人々が、多かれ少なかれ、悔し涙に暮れたのです。それが、オリンピックという現実なのです。

さて、今回のソチ五輪のハイライトは、何といつても浅田真央さんでした。私は、閉幕式前夜に行われたエキシビジョンで、明るく氷上に舞う彼女の姿を見るのができました。フリーで彼女が見せた劇的な演技と歓びにむせぶ場面が脳裏に甦つてきました。涙と笑顔、失意と歓喜、真央さんは、何か、とても大切なことを思い出させてくれました。人生において勝つこと以上に大切なものがこの世にはあるということ。常人がおよそ背負うことなどできない重圧のなかで、日々、節制を重ね、鍛えてきた技術と美しさの極限を競い合う——、想像するだけで頭がくらくらしそうです。しかし、どんなに努力を重ねても、それが、報われたり、報われなかつたりする。それがスポーツの世界です。ただ、前日の失敗を、あれほど劇的なかたちで覆し、世界の人々に大きな希望と喜びを与えることのできた真央さんは、逆に、世界一幸せな人かもしれない、と思いました。私は、その前日の第一面の記事をはつきりと覚えていいます。「真央、まさかの十六位」——。この新聞らしくないタイトルが、事態のすべてを物語っていました。

しかし、その翌日、とてもうれしく思ったことがありました。真央さんの失意を見守っていたのは、日本のファンたちだけではない、フィギュアスケートの歴史に名前を刻んだ多くの名選手たちが、数々の励ましの言葉を真央さんに贈っていたという事実です。オリンピックは、ある意味で、自分たちの国の選手だけを応援するという、ナショナルリズムの素直な発露が許される特権的な場です。しかし、過去の名選手たちは、自分たちの苦しみを思い、ナショナルなものを超えて、オリンピックを、わがこのように、固唾を飲んで見守っていたのでした。そのとき、私はふと気づいたのです。自分たちの語る言語や、文化的な背景を越え、互いに支え合おうとする、無言の英知の世界が存在するということ。苦しい練習に耐えてオリンピックの舞台に立ち、無言のまま去っていった選手たちの大いなる存在。栄光だけがスポーツではありません。いえ、栄光は、一パーセント以下の確率でしか生まれ得ないのです。スポーツとは、失敗と、敗北と、挫折からなっているとどうも過言ではありません。そして人生もまた然り。

さて、私はみなさんに学んでほしいと思います。みなさんがこれから、さまざまな職場で、あるいは、学びの場で、遭遇するかもしれない失敗について。このように言う私も、これまでたくさんの失敗、挫折を重ねてきました。誇りを持って世に問うた仕事や、逆に大きな批判にさらされたこともあります。みなさんが抱える仕事や大きくなればなるほど、批判も大きくなります。

しかし大切なのは、失敗を恐れず、常に堂々と前進する気持ち、心意気を忘れないことです。失敗したら、引き返せばよいし、率直に誤りを正すことが大切です。嘘をついてごまかそうとすること、自分の失敗や嘘の弁解ほど醜いものはありません。そしてその後からでも、やはり前を向いて、自分の可能性、自分の人生が持つている隠された可能性を信じ、挑戦を続けていってほしいと思っています。人生の、もつとも豊かな果実は、今、みなさんが知らない世界にあり、その未知の世界の何かを自分のものにしたときに初めて、人生の真の喜びが得られるのですから。

かつて、私が失意に落ちていたとき、外国の友人から、こんな励ましを受けました。トルコには、こんな思いきりのいい諺がある、それに学べ、と。『もしも君が目的地向かつて歩み出しながら、途中足を止め、自分に吠えかかる犬の一匹一匹に石を投げつけていたら、とても目的地に辿りつけない』これは、けつして、人の批判に耳を傾けるな、という教訓ではありません。批判には、むしろ率直に、そして謙虚に耳を傾けるべきです。でも、自分がこれだ、と思う大きな課題に取り組んでいるとき、つまり、何らかの強い信念を持って仕事に携わっているとき、周囲のことは、あまり気にするな、ということ。そこで今日は、餞の言葉として、二つほど用意してみました。

一、有能な人間というのは、失敗から学ぶから有能なのだ。成功から学ぶものなど、たかが知れている。(作家ウィリアム・サローヤン)

二、人生万事塞翁が馬(『淮南子』(えなんじ)前漢時代の中国の言葉です。英語では、次のように翻訳されるようです。

A joyful evening may follow a sorrowful morning.

これは、私たちの人生において、幸福、不幸は、予測できないということを意味しています。幸福が不幸に、不幸が幸福にいつ転じるかわかりません。ですから、けつして安易に喜んだり、悲しんだりしてはいけません、ということ。失敗したと感したら、これは、成功の前兆だ、成功したと思つたら、これは、失敗の前兆だ、と思つてくらの気持ちの余裕を失わないこと。私自身、この「人生万事塞翁が馬」の一言に、どれほど助けられてきたことでしょうか。良い時は、確実に来る、と信じていることが大切です。若いみなさんには難しいかもしれませんが、これは、みなさんの末永い将来に向けての餞の言葉、と理解していただけたら幸いです。

さて、卒業生、修了生のみなさんに、ひとつお願いがあります。みなさんが今日別れを告げる私たちの名古屋外国語大学は、まだ歴史の浅い大学です。みなさんの活躍の一つ一つが、私たちの大学の歴史を作り、その基礎を固めていくのです。どうか、名古屋外国語大学で学んだ、そして卒業したという誇りを、いつまでも大切に胸に秘め、その自覚を持って生きてほしいと思います。そして私たち教職員一同、みなさんが、この大学で学んでよかった、卒業できてよかった、と一生思っていただけのように、限りなく努力を積み重ねていく所存です。逆にみなさんのこれからの努力と、将来における活躍によって、私たちの大学NIFSの輝きと未来もまた、日々、新しい生命力を得ることができると信じています。最後にになりましたが、何より、みなさん一人一人のご健康と成功、末永い幸福を祈念して、学長の式辞とします。

二〇一四年三月二十二日

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫